TADOKU JUNIOR　イギリスの昔話　★★★☆☆ ふつう　804語

# Fairy Ointment

## ようせいのぬり薬

Joseph Jacobs（1890年の本）　原文そのまま　朗読：Joy Chan

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　赤ちゃんのせわをたのまれたグッディおばさん。ふしぎなぬり薬をこっそり自分の目にぬってみると、まわりがすっかりかわって見えて……。



Dame Goody was a nurse that looked after sick people, and minded babies. One night she was woke up at midnight, and when she went downstairs, she saw a strange squinny-eyed, little ugly old fellow, who asked her to come to his wife who was too ill to mind her baby. Dame Goody didn't like the look of the old fellow, but business is business; so she popped on her things, and went down to him. And when she got down to him, he whisked her up on to a large coal-black horse with fiery eyes, that stood at the door; and soon they were going at a rare pace, Dame Goody holding on to the old fellow like grim death.

They rode, and they rode, till at last they stopped before a cottage door. So they got down and went in and found the good woman abed with the children playing about; and the babe, a fine bouncing boy, beside her.

Dame Goody took the babe, which was as fine a baby boy as you'd wish to see. The mother, when she handed the baby to Dame Goody to mind, gave her a box of ointment, and told her to stroke the baby's eyes with it as soon as it opened them. After a while it began to open its eyes. Dame Goody saw that it had squinny eyes just like its father. So she took the box of ointment and stroked its two eyelids with it. But she couldn't help wondering what it was for, as she had never seen such a thing done before. So she looked to see if the others were looking, and, when they were not noticing she stroked her own right eyelid with the ointment.

No sooner had she done so, than everything seemed changed about her. The cottage became elegantly furnished. The mother in the bed was a beautiful lady, dressed up in white silk. The little baby was still more beautiful than before, and its clothes were made of a sort of silvery gauze. Its little brothers and sisters around the bed were flat-nosed imps with pointed ears, who made faces at one another, and scratched their polls. Sometimes they would pull the sick lady's ears with their long and hairy paws. In fact, they were up to all kinds of mischief; and Dame Goody knew that she had got into a house of pixies. But she said nothing to nobody, and as soon as the lady was well enough to mind the baby, she asked the old fellow to take her back home. So he came round to the door with the coal-black horse with eyes of fire, and off they went as fast as before, or perhaps a little faster, till they came to Dame Goody's cottage, where the squinny-eyed old fellow lifted her down and left her, thanking her civilly enough, and paying her more than she had ever been paid before for such service.

Now next day happened to be market-day, and as Dame Goody had been away from home, she wanted many things in the house, and trudged off to get them at the market. As she was buying the things she wanted, who should she see but the squinny-eyed old fellow who had taken her on the coal-black horse. And what do you think he was doing? Why he went about from stall to stall taking up things

from each, here some fruit, and there some eggs, and so on; and no one seemed to take any notice.

Now Dame Goody did not think it her business to interfere, but she thought she ought not to let so good a customer pass without speaking. So she ups to him and bobs a curtsey and said: “Gooden, sir, I hopes as how your good lady and the little one are as well as——”

But she couldn't finish what she was a-saying, for the funny old fellow started back in surprise, and he says to her, says he: “What! do you see me today?”

“See you,” says she, “why, of course I do, as plain as the sun in the skies, and what's more,” says she, “I see you are busy too, into the bargain.”

“Ah, you see too much,” said he; “now, pray, with which eye do you see all this?”

“With the right eye to be sure,” said she, as proud as can be to find him out.

“The ointment! The ointment!” cried the old pixy thief. “Take that for meddling with what don't concern you: you shall see me no more.” And with that he struck her on her right eye, and she couldn't see him any more; and, what was worse, she was blind on the right side from that hour till the day of her death.

グッディおばさんは、病気の人のせわをしたり、赤ちゃんのおもりをしたりする仕事をしていました。ある夜、真夜中におこされて下へおりていくと、目つきのへんな、みにくい小さなおじいさんが立っていました。おじいさんは、おくさんが病気で赤ちゃんのせわができないので来てほしい、とたのみました。グッディおばさんは、そのおじいさんの見かけが気に入りませんでしたが、仕事は仕事です。そこで、さっと身じたくをして、おじいさんのところへおりていきました。おりていくと、おじいさんはおばさんをひょいとかかえて、戸口に立っていた、まっ黒で目が火のように光る大きな馬に乗せました。すぐに馬はものすごいいきおいで走りだし、グッディおばさんは、ひっしでおじいさんにしがみついていました。

二人はどんどん馬を走らせて、とうとう、ある小さな家の戸口の前で止まりました。馬からおりて中に入ると、おくさんがベッドにねていて、子どもたちがそのまわりで遊んでいました。そしてそのそばには、元気いっぱいの男の赤ちゃんがいました。

グッディおばさんは赤ちゃんをだきとりました。それは、だれもが見たいと思うような、りっぱな男の赤ちゃんでした。おかあさんは、赤ちゃんをグッディおばさんにあずけるときに、ぬり薬の箱をわたして、赤ちゃんが目をあけたら、すぐにこれで目をなでてやってください、と言いました。しばらくすると、赤ちゃんが目をあけはじめました。グッディおばさんは、赤ちゃんがお父さんそっくりの、へんな目つきをしているのに気がつきました。そこでおばさんは、ぬり薬の箱を取って、赤ちゃんの両方のまぶたをなでました。けれども、これはいったい何のためなのだろうと、ふしぎでたまりませんでした。こんなことをするのは、見たことがなかったからです。そこで、ほかの人たちが見ていないかたしかめて、だれも気づいていないすきに、自分の右のまぶたにぬり薬をぬってみました。

そのとたん、まわりのものがすっかりかわって見えました。小さな家は、りっぱな家ぐがそろった、美しい部屋になりました。ベッドのおかあさんは、白いきぬのドレスを着た、きれいなおくさまでした。赤ちゃんはまえよりもっと美しくなり、着ているものは、銀色のうすいぬののようなものでできていました。ベッドのまわりにいた赤ちゃんの兄弟たちは、鼻がぺちゃんこで耳のとがった小おにたちで、おたがいにしかめっつらをしあったり、頭をかいたりしていました。ときどき、毛むくじゃらの長い手で、病気のおくさまの耳を引っぱったりもしました。じつのところ、小おにたちは、ありとあらゆるいたずらをしていました。それでグッディおばさんは、自分がピクシー（小さなようせい）の家に来てしまったのだとわかりました。けれどもおばさんは、だれにも何も言わず、おくさまが赤ちゃんのせわをできるくらい元気になるとすぐ、おじいさんに家まで送ってくださいとたのみました。そこでおじいさんは、火のような目をしたまっ黒な馬をつれて戸口にやってきました。二人は来たときと同じくらい、いや、もしかするともう少し速く走って、グッディおばさんの家に着きました。目つきのへんなおじいさんは、おばさんを馬からおろして、ていねいにお礼を言い、こういう仕事でそれまでもらったことのないほどたくさんのお金をはらって、帰っていきました。

さて、次の日はちょうど市の日でした。グッディおばさんは家をるすにしていたので、家にいるものがいろいろたりなくなっていて、それを買いに市場まででてくてく出かけました。ほしいものを買っていると、なんと、あの目つきのへんなおじいさんがいるではありませんか。黒い馬におばさんを乗せていった、あのおじいさんです。おじいさんは何をしていたと思いますか？なんと、店から店へと歩きまわって、ここではくだ

もの、あそこではたまご、というぐあいに、どの店からも品物を取っていくのです。それなのに、だれも気がついていないようでした。

さて、グッディおばさんは、口出しするのは自分のすることではないと思いましたが、あんなにいいお客さんに、あいさつもせずに通りすぎるわけにはいかないと思いました。そこで、おじいさんのところへ行って、ちょこんとおじぎをして言いました。「こんにちは、だんなさま。おくさまと赤ちゃんは、お元気で――」

けれども、言いおわらないうちに、おかしなおじいさんはおどろいて後ずさりし、こう言いました。「なんだと！ きょうは、わしのすがたが見えるのか？」

「見えるかですって」とおばさんは言いました。「ええ、もちろん見えますとも。空のお日さまみたいにはっきりとね。それにね」とおばさんはつづけました。「おいそがしそうなのも、ちゃんと見えていますよ。」

「ああ、おまえは見えすぎる」とおじいさんは言いました。「では聞くが、どっちの目でそれが見えるのかね？」

「右の目に決まっていますよ」とおばさんは言いました。おじいさんの正体を見やぶったのが、とてもとくいそうでした。

「あのぬり薬だな！あのぬり薬だ！」と、年とったピクシーのどろぼうはさけびました。「よけいなことに手を出したばつだ。もう二度と、わしのすがたは見えなくなるぞ。」そう言うと、おじいさんはおばさんの右の目をぴしゃりと打ちました。するとおばさんには、もうおじいさんのすがたが見えなくなりました。それればかりか、その日から一生のあいだ、右の目が見えないままになってしまったのです。

## たんご と クイズ ようせいのぬり薬

| | | |
|---|---|---|
| **ointment** ぬり薬 | **baby** 赤ちゃん | **horse** 馬 |
| **eyes** 目 | **market** 市場 | **fruit** くだもの |
| **eggs** たまご | | |

**Q1** グッディおばさんが、こっそりぬり薬をぬったのは？

① 左の手　② 自分の右のまぶた　③ 赤ちゃんの口

**Q2** ぬり薬をぬると、赤ちゃんの兄弟たちは何に見えた？

① 耳のとがった小おに　② かわいい子ネコ　③ 小さな天使

**Q3** 市場で、おじいさんは何をしていた？

① 野さいを売っていた　② おどりをおどっていた　③ お店の品物を取っていた

**こたえ**

Q1 ②　だれも見ていないすきに、自分の右のまぶたにこっそりぬり薬をぬってみました。

Q2 ①　鼻がぺちゃんこで耳のとがった小おにたちに見えました。そこはピクシーの家だったのです。

Q3 ③　店から店へ歩きまわって、くだものやたまごを取っていました。でも、だれも気づいていませんでした。

**原田英語の多読ベストジュニア**

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

**出典**　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #7439（Joseph Jacobs、1890年）。パブリックドメイン。
挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。
朗読（Web版）：Joy Chan（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。